

# グレート・ハイランド・バグパイプ



ジェラルド・ミュアヘッドが著した記事より

2003年、ジェラルド・ミュアヘッドは浜松楽器博物館で、バグパイプの演奏とスコットランドの伝統的ダンスを加えて、講演会とコンサートを開催しました。2015年には、浜松市立美術館の展示用に本物の高品質なバグパイプ一式を提供しました。また、次の記事は、博物館のパンフレットの一部として、スコットランドのハイランドバグパイプとその音楽の歴史について、ジェラルドが簡単に説明しています。



## グレート・ハイランド・バグパイプ

バグパイプはスコットランドの国の楽器であり、スコットランドの文化を象徴するものである。グレート・ハイランド・バグパイプほど特徴的なバグパイプは世界にはほとんどない。グレート・ハイランド・バグパイプは世界で最も有名なバグパイプであるだろう。



*Tibia Utricularis*  
Bagpipe of the Ancients  
From a Bas relief in Roman Dolace  
古代ローマ帝国時代のバグパイプ  
(ティビア・ウトリアキュラリス)

# 歴史

バグパイプは古代から続く楽器の代表である。起源は中東で、古代文明の拡張とともにヨーロッパに広がった。「オックスフォード・ヒストリー・オブ・ミュージック」には、トルコのユクで発見されたヒッタイト粘土板にバグパイプの最初の記述があると述べている。このバグパイプは紀元前1000年に遡る。聖書の創世記やダニエル書には、ネブガドネザル王の楽団にシンフォニアという楽器があったと記述があり、これはバグパイプであると考えられている。ローマ時代のコインには、フィドルではなくバグパイプを演奏する皇帝ネロの姿が刻まれている。ヨーロッパでは、ブリュゲルやテニールス、ヨルダーンズ、デューラーの絵画に、初期のドゥーゼル・ザックがたくさん描かれている。文書や彫刻にもバグパイプの記録があり、イングランド全土にバグパイプが広まっていたことは疑いがない。中世の教会にはバグパイプの浮彫が残っているし、チョーサーは「ミラーの物語」の中でミラーがバグパイプを吹いていることに言及している。シェイクスピアの「ヘンリー4世」では「リンカシャーのバグパイプのドローン」という記述があるし、ヘンリー7世や8世はバグパイプ奏者の演奏を楽しんでいたと考えられている。



CHAUCER'S MILLER (XIV Century)  
"A bagge-pipe wel coude he blowe and soune  
And therwithal he brougte us out of Loune"  
14世紀のチョーサーの作品「ミラーの物語」の挿入画

ハイランド・パイプは英語圏では大変よく目にする。バグパイプそのものはヨーロッパ、トルコ、コーカサス、ペルシア湾沿岸の広大な地域で、何世紀にもわたって演奏され続けられているが、スコットランドでは、それらの地域とは異なったスタイルのバグパイプが広まった。「ピーブ・モール」（大きなパイプの意）と言うもので、これが現在の国の楽器であるグレート・ハイランド・バグパイプになる。

現在3本あるドローン管だが、当初は無しか1本であった。2本目が付いたのは1500年代中頃から終わりにかけてであり、さらに長い3本目が付いたのは1700年代である。管体には地元産の木や骨を使用した。現在では、木材はアフリカ産ブラックウッドのエボニーやグラナディアである。管のジョイント部の補強や、湿気、乾燥による割れを防ぐために、象牙（現在は人工象牙）や銀などの金属が使われる。

# 音楽

チューニングはドローン管に合わせる。こしてこそ快適なハーモニーが生まれる。チャンター管（メロディを吹く管）はドローンに合わせてチューニングするので、現代の調律、つまり平均律ではない。チャンター管の各音をドローン管に合わせてチューニングすれば、それは「純正律」となる。メロディで使う音と3つのドローン管の音がきちんとチューニングされれば、4つの音は快適な和音となる。これは長年の耳の訓練と演奏経験によってのみ実現できるものであるが、残念なことにバグパイプを学習している多くの人が、正しくチューニングされた楽器を持っていない。スコットランドに広がった最初のバグパイプは少し低めのA調だったが、現代は半音高くB♭調になっている。

# 音楽のスタイル

音楽は大きく2種類ある。ひとつはゲール語でキョール・ベック（小さな音楽の意味）とよばれるもので、ストラスペイやリール、ジグ、マーチ、スロー・エアなど、軍隊や社会のイベント用の音楽。もうひとつは、ピーボッホで、いわばバグパイプのクラシック音楽である。ピーボッホはピアノができる100年以上も前に作られたもので楽譜はない。クラン（氏族）のお城で、晩餐会など社交の場で演奏された。また、戦いの前の意気高揚のために演奏された。ゆっくりとして風格があり、複雑な音楽構成で、一曲は10分以上と長い。



ペバリー・ミンスター教会の壁の彫像

ピーボッホには、サリュート（重要な人物へ捧げる音楽）、ギャザリング（クランのメンバーの集合の音楽）、ラメント、エレジー（悲しみや人の死を表す音楽）、歴史的出来事に関する音楽、の4種類がある。

パイパーが長い期間をかけて勉強し、クランの族長に仕えるパイパーとなるための、特別な学校が設立された。例えば、マッカーサー・カレッジやマックリモン・カレッジである。伝統的には、バグパイプ音楽は、canntaireachd と呼ばれる口頭伝承法によって教育されてきた。- canntaireachd とはゲール語で「歌う」という意味で、特定の母音や子音を歌い、またその組み合わせで、音の高さや装飾の仕方を示す。

19世紀から20世紀にかけては、演奏コンテスト用の音楽も発展した。有名作品のいくつかはこの時代に作曲され、今日でも演奏される。ヴィクトリア時代の偉大な奏者は、コンテスト用のマーチやストラスペイ、リールを作曲した。演奏はかなり難しいが、大変力強い作品である。

ハイランドパイプの演奏は伝統的には独奏だが、イギリス軍がドラムと組み合わせて世界中に広めたことからバンドが生まれた。スコットランド出身の兵士は、赴任地にバグパイプを持って行った。イギリス軍の最初のドラム奏者はアフリカ人が多かったので、バグパイプとドラムという世界で最も古いふたつの楽器が組み合わせられたことは不思議ではない。一方、軍隊とは関係のない地域バンドも生まれ、音楽を軸にしてコミュニティを存続していくことに貢献した。この種のバンドはコリアリーバンドとよばれる。今日では大学のバンドも盛んで、最も成功しているのはカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州のサイモン・フレイザー大学である。

ハイランド・バグパイプは、現在、ハイランドゲームなど野外で演奏されることが多い。毎年8月には世界中からチャンピオンシップをめざしてパイパーがグラスゴーに集まる。コンテストは一週間開催される。パーティーでのエンターテイメントやフォークミュージックの演奏、ソロパフォーマンスで演奏する時は、スコティッシュ・ハイランド・ダンスが付くことが普通である。このような集会は多くの国で広まり、特にカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどイギリス連邦諸国で人気が高い。ブリタニー諸島では、オーボエに似た地元の楽器ボンバルドと組み合わせたバンドも作られた。ソロコンテストでは、グレンフィディク・パイピング・チャンピオンシップ（キョールベック）、ダンヴェガン・シルバー・チャンター・コンペティション（ピープロホ）が一流である。



16世紀のデュレーによる版画

## 結び

20世紀になってバグパイプの演奏が途絶えかけたが、その後再び楽器への関心が高まり、21世紀を迎えた。現在の復興は以下の理由によるだろう。質の良い楽器が入手できるようになったこと、良い指導者が現れたこと（個人レッスンやインターネット）、ソロ、バンド、伝統曲、現代曲の多くの録音が存在することである。

バグパイプはスコットランド人にとって心の中の特別な存在である。結婚式や卒業式、パレードで、また葬儀においてさえ演奏され、社会という織物の一部分を担っている。バグパイプが永遠の楽器として、この厳しい競争社会において生き残ってきたのは、ひとえに、普通の人々も熱心な愛好家とともにバグパイプを愛し尊敬してきたからである。ハイランド・パイプは高度に発達したが、基本的には3000年以上も形や機能は変わっていない。バグパイプは、スコットランドの、また世界の音楽遺産の、本質的な部分なのである。（ジェラルド・ミューヘッド）